

安里進氏の「ホゾ穴と正面向き 検証・首里城大龍柱」（6月1,2日付、以下「記事」と略）を読ませていただいた。この中で東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の写真（以下「新資料写真」と略）が公開された。この写真で昭和の沖縄神社拝殿への改修の時、大龍柱のトグロ巻部の背面が御庭側に向けられていたことが明らかになった。

私は、この改修の時、大龍柱が正面向きから相対向きに変えられたのは、頭部胴体のみで、トグロ巻部は動かされていないと思っていた。この写真によりその認識が誤っており、トグロ巻部は180度回されていることを知った。なぜこのようなことをする必要があったのか全く分からない不可思議な行為であるが、これが写真の示す事実である。

私はこの「トグロ巻部は動かされていないと思っていた」誤った認識のもと、安里氏の技術検討委員会報告資料（以下「報告資料」と略）がデータ改竄で捏造報告ではないかと、沖縄総合事務局及び沖縄県立芸術大学に「研究上の不正行為」の疑いがあると告発し、調査委員会の設置を要望していたので、「記事」掲載の翌日6月3日付でこの告発を取り消す文書を発送した。

私が事実認識を誤った上での告発であったので、これを取り下げるのは当然であり、この認識のもとでデータ改竄、捏造報告の不正行為だと指摘したことについては、読者諸氏にもお詫び申し上げたい。「新資料写真」が示す事実、研究者として謙虚にその誤りを認めさせていただく。

しかし、安里氏の論考の手順、方法が通常では考えられないものであったのは事実である。「報告資料」において安里氏はトグロ巻部の展開図を作成する際に、背面に当たる部分を二つの写真を合成して作っていた。6月2日付「記事」のように「新資料写真」のみで作成していれば、このような疑義は生じなかった。何故、わざわざ上部に田辺泰の写真を合成したのだろう。それ以前の問題として、展開図など示す必要はなく、例え解像度の低いものしか入手していなかったとしても「新資料写真」をそのまま提示し、これにトグロ巻部背面が写っていることを説明すれば良かったのである。

今回、その「新資料写真」がかなりの解像度で公開されたのは大変に喜ばしい。これにより、欠損部の補修前の状態が明らかになり、ごく僅かな部分ではあるが、大龍柱の背面の状態の確認を進めることが可能になった。

安里氏は6月2日付「記事」で、戦前大龍柱より古い遺物には無彫刻の平坦部分があるが「新資料写真」により戦前大龍柱の背面にはウロコ彫刻があること、そして、カスガイ溝の深さとホゾ穴の深さの関係から「欠損部にホゾ穴はなかったと私は考えている」としているが、これはかなり客観性を欠く考察である。戦前大龍柱が欄干に接続していたとして、古い遺物の時と同様の接続方法であったかどうかは不明であり、ホゾ穴の周りの無彫刻部分

にカスガイが嵌められていた可能性もあるからである。

熊本鎮台沖繩分遣隊によって折られた戦前大龍柱の阿形、それに合わせて切断された吡形の頭部胴体と台石上のトグロ巻部が繋ぎ合わされた時、カスガイはそれぞれ三箇所嵌められたことが、鎌倉芳太郎と坂本万七の写真、そして「新資料写真」から確認できる。阿形は左右と前面、吡形は左右と背面の三箇所である。

「新資料写真」の吡形は今回かなり解像度の良い写真が公開されたが、阿形については6月1日付「記事」の図1で背景を切り抜かれた小さな写真しか公開されていない。この阿形についても、解像度が良く、切り抜きなどされていない写真の公開を望むものである。阿形のトグロ巻部背面にはカスガイ跡は無いはずなので、ホゾ穴の存在の有無を確認できる可能性が高いと考えられる。

技術検討委員会に望みたいのは、「新資料写真」のような新しく入手した重要な資料は、できる限りオリジナルな状態ですぐに公開していただきたい。さまざまな分野の多くの人の目に触れ検討が行われることで、事実への認識が進むことが期待できるからである。

安里氏は6月2日付「記事」の最後で、「学術的議論に、感情的な言葉や相手を貶める言葉を持ち込むと冷静な判断や評価ができなくなる。新聞はそうした言葉による議論を助長しないでほしい」としているが、私の論考は決して感情的で相手を貶めるためのものではないし、安里氏の論考の手順、方法が通常では考えられないものであったことに起因するのを自覚すべきである。そしてこれは、新聞紙上での自由な議論を萎縮させるものである。私が事実認識を誤った上で告発したのは率直にお詫びするが、このことで「新資料写真」が公開されたのは、事実への認識の進展に寄与している。

何よりも、「学術的議論」を望むのであれば、私が2020年10月から指摘し続けている「絵図だけでは大龍柱の向きは特定できない」ことに対して学術的な反論を行うべきである。これを無視して「寸法記」絵図や「尚家文書」絵図を「正しい」ものと言うことはできない。

1枚の写真の示す歴史的事実に対して謙虚になることが必要なのは、まさにルヴェルトが撮影の首里城正殿写真に対してである。ルヴェルトが写真により王国時代の大龍柱の姿は明らかになった。横向きの大龍柱が描かれた尚家文書を「正しい」ものと言うなら、これが描かれた1846年からルヴェルトが撮影の1877年までの間に大龍柱の向きを変えたことを示す古文書の発見が必須である。これが発見できないにも関わらず、「暫定的な結論」として相対向きを押し通すことは明らかな論理破綻である。

推測による復元は断じて行ってはならない。現段階では、ルヴェルトが写真の示す姿が唯一確実な歴史的事実であり、これが「暫定的な結論」となるべきなのは明らかである。

そしてもしも、1846年から1877年までに大龍柱の向きを変えたことを示す古文書が発見されれば、相対向きに直せばよいし、「新資料写真」を詳細に検討するなどしてホゾ穴の存在を証明できれば台石を撤去するという、冷静で科学的な対応こそがとられるべきなのである。技術検討委員会こそが「学術的議論」を放棄している。